

百庚申

庚申とは、中国の道教を起源とし、仏教と神道の影響を受けた民間信仰のことである。

「庚申」という言葉は、60日を一周期とする中国の干支の57日目を指す。庚申の当夜、眠りにつくと、人間の体内にいる三尸（さんし）が逃げ出して、眠っている宿主の悪事を天の王宮へ報告し、その内容によっては宿主の寿命が短くなると信じられていた。そのため、虫たちが逃げ出さないよう、庚申の講員たちは一晩中起きていたのである。

この儀式は、秘教である天台宗の僧が8～9世紀に日本にもたらしたと考えられており、平安時代（794～1185）に朝廷内で普及し、その後1400年代に大きく広まった。講員たちは60日ごとに寝ずの番を行い、それを3年で計18回行った。その周期が終わった際に、感謝の気持ちとして自らの名前を記した小さな碑を建てるという慣習は江戸時代（1603～1867）に始まったものである。

庚申信仰は60日ごとだけでなく、60年ごとにも適用される。60年を一巡とする中国の干支では、57年目である庚申の年に大災害に見舞われると考えられているため、庚申講員はその年に大きな碑を建てている。ここにある4つの碑は1800～1980年の間に建てられたものである。「庚申」とだけ刻まれている碑は後のほうに建てられたもので、病気を退治する神・青面金剛（しょうめんこんごう）の像が彫られている碑は、それよりもさらに古いものと考えられている。19世紀末に道端の神社が禁じられて道が拡張された際に、多くの石碑は破壊されてしまったが、この場所のように地域の人々がすべて1か所に集めることで破壊を免れたものもあった。